

「ブドリよ、私は未だ眠ることができない」

劇団参人芝居2003年夏公演上演用台本

第10回テアトロ新人戯曲賞受賞作品

ブドリは死んだ。大循環の風になり、大空の塵になつた。誰もが思っていた。しかし、ブドリは生きていた。妹と共に森の中に逃げ込んでいたのだ・・・。

作 やのひでのり

演出 山崎哲

登場人物

工藤一（ブドリ）

絵里（ネリ）

沢村（ペンネン技師）

大久保（クーボ博士）

玄造（赤髭）

幸子

小夜（玄造の妻）

人さらい

木下（てぐす飼い）

トラ

男1

男2

研究員1

研究員2

農民1

農民2

農民3

農民4

1場 森の家

雷鳴。

嵐の日。

同じ舞台上に二つの空間。

奥。(紗の奥)母と子が静かにたたずむ。

手前。激しくもだえる男が一人。

頭に包帯を巻いた工藤がいる。

母、絵里が子、幸子に物語を読んで聞かせている。

絵里 ところが6月もはじめになって、まだ黄色のオリザの苗や、芽を出さない樹をみますとブドリはもう居ても立ってもいられませんでした。このままで過ぎるなら、森にも野原にも、ちようどあの年のブドリの家族のようになる人がたくさんできるのです。ブドリはまるで物も食べずに幾晩も考えました。ある晩ブドリは、クーボ大博士のうちを訪ねました。「先生、気層のなかに炭酸ガスがくれば暖かくなるのですか」「それはなるだろう。地球ができてからいままでの気温は、大抵空気中の炭酸ガスの量できまつたといわれる位だからね」「カルボナード火山島が、いま爆発したら、この気候を変える位の炭酸ガスを噴くでしょうか」「それは僕も計算した。あれが今、爆発すれば、ガスはすぐ大循環の上層の風に混じって地球全体を包むだろう。そして下層の空気や地表からの熱の放出を防ぎ、地球全体を平均で5度くらい温かにするだろうと思う」「先生、あれを今すぐ噴かせられないでしょうか」「それはできるだろう。けれども、その仕事にいったものうち、最後の一人はどうしても逃げられないのでね」

雷鳴。

工藤 (しくしくと泣いている)

死にたくない。まだ、死にたくない！

僕は、どうしたらいいかわからない。

一生懸命やってきたじゃないですか。

僕だけのためじゃない、みんなのために。違いますか。

あなたは残酷だ。確かに僕は妹に会いたいと願った。毎日毎日。

僕はただそれだけが楽しみに生きてきたんだ。

.....

妹に会わせてくれたことには感謝します。

でも……..「うしろつらなとき」……..だからこそ……..僕は、  
僕は、ためらうのです。

僕はどうしたらいいのかわからない。

雷鳴。

絵里 ブドリはいいました。

「先生、私にそれをやらせてください。どうか先生からペンネン  
先生へのお許しの出るようお願いをください」

「それはいけない。君はまだ若いし、今の君の仕事に代わるも  
のはそうはいない」

「私のようなものはこれから沢山できます。私よりもっともつと  
何でもできる人が、私よりもっと美しく、仕事をしたり笑ったり  
して行くのですから」

それから三日の後、火山局の船がカルボナード島にいそいで行き  
ました。そこへいくつもやぐらは建ち、電線は連結されました。  
すっかり支度ができると、ブドリはみんなを船で帰してしまって、  
自分は一人島に残りました。

そしてその次の日、イーハトーブの人たちは、青空が緑色に濁り、  
日や月があかがね色になったのを見ました。けれどもそれから3、  
4日たちますと、気候はぐんぐん暖かくなってきて、その秋はほ  
ぼ普通の作柄になりました。

そしてちようど、このお話のはじまりのようになるはずの、沢山  
のブドリのお父さんやお母さんは、沢山のブドリやネリと一緒に、  
その冬を暖かい食べ物と、明るい薪で楽しく暮らすことができた  
のでした。

……..おしまい。

幸子 ブドリ死んじゃったの？

絵里 そうよ。ブドリはね。みんなのために命を捨てたのよ。

幸子 かわいそう。

絵里 そうね。かわいそうね。

幸子 怖くなかったのかな。

絵里 …..ブドリも本当は怖かったのかもしれないわね。

幸子 私がブドリだったらきつと無理だな。死ぬのなんて。

絵里 あら。

幸子 私には母さんがいるもん。母さんを置いて死ぬなんてこと  
できないもの。

絵里 そう。

幸子 ブドリは父さんも母さんも死んじゃって、妹と2人きりだっ

たんでしょ。

妹はきつと悲しんだと思うよ。ブドリは妹がひとりぼっちになつてしまうことを考えなかつたのかなあ。

絵里 もちろん考えたわ。そして悩んだのよ。

だから、だからね……。

幸子 私、信じられない。だってたとえば母さんがみんなのために死ななくちゃいけなくなったら、私、やだもん。私、ひとりになるのやだもん。

絵里 ありがとう。私もそうよ。あなたを置いて死ねないわ。

幸子 だったらどうしてブドリは。

絵里 さあ、もう遅いわ。幸子、お休みなさい。

幸子 母さん、どうして、どうしてなの。教えてよ。

絵里 それは……物語だから。だから彼は伝説の人になったのよ。

「グスコープドリの伝記」にね。

ブドリは普通の人とは違うの。

私たちよりずっとずっと美しい人なの。

落雷。

工藤 普通の人なんです！ 僕だって、僕だって、みんなと同じ普通の人なんです！ みんなと同じように……。

僕は、みんながいう程強い人間ではありません。勤勉でもありません。純粹でもありません。

でも、なぜ僕なんですか。なぜあなたは僕を伝説の人物に選ばれたのですか。

斜め前方から光がさす。

雷鳴。

工藤 僕しかないんですね。

僕がやらないといけないんですね。(泣く)

雷鳴。

工藤 ああ、妹と一緒に暮らしていたい。ほかには何も望みません。

落雷。

二つの空間が一つになる。

工藤と絵里。

絵里 あなた。

工藤 ……。

絵里 幸子は今、眠ったところです。

工藤 ……。

絵里 怪我の方は大丈夫。

工藤 ああ、…眠れないんだ。

絵里 体を冷やさないようにね。もう休んだ方がいいわ。外はすっかり嵐のようだし。

工藤 そうする。

工藤、やかんの水を飲む。

工藤 (頭を押さえる、しゃがむ) ああ。

絵里 大丈夫？まだ痛むの？

工藤 心配ない。横になればすぐにおさまる。

扉をたたく音がする。

絵里 ……。

今度はさらに強く扉をたたく。

絵里 こんな日に誰かしら。

工藤 さあ。

男の声が聞こえる。

玄造 すみません！ 開けてください。おねがいします！

絵里 ほおっておきましょう。そのうちあきらめて帰るでしょう。

工藤 そいうわけにはいかんだろう。

絵里 ……。

工藤は扉を開ける。

風が部屋の中に吹き込む。

外套を着、ずぶぬれになった赤髭の男がたっている。

玄造 夜分遅くすみません。私、この山のふもとで農業を営んでるものなのですが。

工藤 はい。

玄造 息子が急に熱を出しまして。薬を分けていただけないでしょうか。熱が高くてもう死にそうなんです。

工藤 それは。しかし・

(絵里を見る)薬はあいにく切らしてまして。

玄造 そうですか。だったらしかたありません。ほかを探します。

工藤 お役にたてなくて。しかし、こんな山奥までどうして。薬だったら街にいった方がいいでしょう。

玄造 いや、街はもうだめです。すっかり、荒れてます。

飢饉の年があったでしょう。あなたは山におられるから詳しくは存じ上げないかもしれませんが。そりゃもう、ひどいもんです。あれから数年、気候はいつころによくならない。薬なんてとんでもない。もう、街には食べる物さえない。餓死する者もたくさんでます。

私ら農民はまだ蓄えがあったからしばらくはなんとかしのいでいたのですが。街のもんはもう、目も当てられんです。

工藤 そうだったんですか……。

玄造 ……あなた、どこかでお会いしました？

工藤 いや、私は……。

玄造 いや、どこかで見えた顔だ。

工藤 そうですか？

絵里 お帰りください。家には私達が食べていくためのぎりぎりの食料があります。ほかにはなにもありません。

玄造 私は食料など欲しいとはいってない。

絵里 さあ、おひきとりください。(工藤に)あなた、もう休んで。

玄造 ……一(はじめ)。

絵里、驚く。

玄造 やっぱり、一だ。一なんだろう。

工藤 ……。

玄造 一。一。どうしてこんなところに？ とつ、昔、死んだときいていたぞ。

工藤 ……。

玄造 わしを忘れたとはいわせんぞ。一。お前に農業のすべてを教えた山師の玄造だ。わかるだろう。

絵里 人違いです。お帰りください。

玄造 人違いだと！ そんなことない。こいつは確かに一だ。工藤一だ。

一、一、どこでなにをしている。

工藤 ……。

絵里 この人は怪我をしてるんです。頭を強く打って……。それに……へんなことというのはやめてください。

工藤 ……。

絵里 さあ、お帰りください。

幸子がおきてくる。

幸子 母さん、どうしたの。

絵里 お客さまです。今、お帰りになるところです。奥の部屋に行ってください。

玄造 ブドリ！

工藤 ……。(驚く)

玄造 ブドリ。ここで何をしている。

絵里 さあ、お帰りください。

幸子 ブドリ？ 私知ってるよ。ねえ、ブドリってグスコブドリのことですよ。

玄造 お嬢ちゃん、ブドリを知ってるのか。

幸子 うん、知ってるよ。さっき母さんから聞いたもん。

でも、ブドリは死んだんだ。みんなを飢饉から救うために。そのおかげでね。町中の人が世界中の人が、救われたんだ。

火山を爆発させるスイッチをいれるためにね。ブドリはひとりで山に入ったんだ。

火山は大爆発をして、気温はぐんぐんあがっていった。

玄造 火山が爆発？

幸子 そうだよ。ブドリはダイナマイトを使ってね。火山の噴火の時期を早めたんだ。

そうして気温がぐんぐんとあがって農作物がたくさん取れた。それで私たちは飢饉から救われた。

玄造 お嬢ちゃん、ここ数十年火山が噴火したという話はきいたことないよ。

幸子 うそよ。ブドリは火山を噴火させた。そして死んだの。それでみんな飢饉から救われたんだ。

玄造 飢饉は今もずっと続いているよ。

幸子 母さん！

絵里 幸子あれは物語なの。さあ、もう寝なさい。

突然、叫び苦しむ工藤。玄造にくっついてかかる。

工藤 火山は！ 火山は噴火しなかったのですか。計画は失敗したのですか。



玄造 何だと。

工藤 あなた、今、ここ数十年火山は噴火していない。飢饉は続いている。そうおっしゃった。

玄造 そうだとも。その通りだ。火山なんて噴火してない。そして飢饉はもう何年も続いている。

工藤 しかし、私は噴火させた。

玄造 ……。

絵里 この人、さきほどから気分が悪くて。ほんと、おかしいことばかり言うものですから。

工藤 おかしい。・・・思い出したぞ。確か、火山は噴火したんだ。僕は火山を噴火させたんだ。

おかしい。なぜなんだ。

なあ、火山はどうなったんだ。火山はどうなったんだよ！

絵里 やめて！

落雷。激しい雨。

沢村と大久保が現れる。

玄造と同じく、二人とも外套を着、ずぶぬれだ。

沢村 火山はどうにもなってないよ。ブドリ君。

工藤 ……。

沢村 ブドリ君、ブドリ君だね。

工藤 先生。

沢村 やっぱりそうだ。

大久保 (息も絶え絶えに) こんなところで君に会えるとは非常に残念だよ。

沢村 君はここでなにをやっているのだ。

答えなさい。君はどうしてこんな山奥に隠れているんだ。

工藤、頭を押さえて苦しがる。

工藤 先生！

沢村、大久保、玄造。それぞれ「ブドリ」の名前を呼び、なじむ。

沢村 ブドリ、ブドリ、いい加減に目を覚まさないか。こんなところで何をしている。お前は逃げたんだ。臆病者。

大久保 ブドリ、君はどういうつもりでここにいるんだ。私は悲しいよ。裏切られたんだからね。

玄造 ブドリ、息子が死にそうなんだ。助けてやってくれ。ブドリ、  
薬がないんだ。

工藤 ああ！

全員、静かに、静かに、ささやくように。

全員 ブドリよ、ブドリよ。

こんなにみんなに見守られながら

お前はまだここで苦しまなければならぬか。

ああ、巨（おお）きな信の力から、ことさらにはなれ

また純粹や小さな徳性の数を失い

わたくしが青ぐらい修羅を歩いているとき

お前は自分にさだめられたみちを

ひとりさびしく往こうとするか

信仰を一つにするたったひとりのみちづれのわたくしが

あかるくつめたい精進のみちから悲しくつかれていて

毒草や蛍光菌のくらしい野原をただよつとき

お前はひとりどこへ行くこうとするのだ

ああ、ブドリよ。

私は未だ眠ることができない。

ああ、ブドリよ。

私は未だ眠ることができない。

暗転。

## 2場 紡績工場

ボタンボタンという機械の音。

バックスクリーンに大きな歯車が映し出される。

中央に大きな鍋が、その中に繭がたくさん浮いている。それを

男たちが紡いでいる。

工藤は疲れのあまり、うつうつとする。

木下が工藤をおこす。

木下 おい、ぐずやろつ。居眠りしやがって。しっかり働け！

食うものばかり食いやがって、穀潰しが。飢饉はとつ昔おわっ

たんだぞ。いま働かなくていつ働くんだ。

工藤 ……。

木下 この一番忙しいときにまったく。みんな！ 急げ！ 繭が蝶

になっちまうぞ。

工藤は紡いだ糸を絡めてしまつ。

木下 ああ、なんてことだ。(糸をからめやがって。)お前は本当にぐずだな。今度やったらくびだ。でていってもらうぞ。

工藤 でていくつて。

木下 しらんよ。どこへなりともいつてれ。

工藤 いやだよ。もともここは僕の家なんだぞ。

木下 おまえの家だと。馬鹿ぬかすな。

このあたりの森はすっかり俺が買ったんだからな。この家ももちろん俺のものだ。

工藤 ……。

木下 いいか。ここはお前の家じゃない。お前の家だったのは飢饉の前のことだ。わかったか。

工藤 ここは僕の家だ。

木下、工藤を痛めつける。

工藤 ああ(痛がる)

木下 (舌打ちして)

何かとつるさい奴だな。ここで黙って手伝うならいいがそつてないならどこかほかのところにいつてもらいたいな。

俺はな。お前が飢饉でたいへんな思いをしたことを知ってる。だから気にかけてやつてるんだ。それをいい気になりやがって。

さあ、どつする。とつとと出ていくか、それともここで働くか。

今ここで決める！

工藤 ……ここで働くよ。

木下 働かせてくださいだろ。

工藤 ……働かせてください。

木下 ふん。当たり前だ。こんな忙しいときにぐちゃぐちゃ抜かしやがって。

(みんなに)さあ、早くしろ、ぼやぼやしていると繭がみんな蝶になっちまうぞ。いそげ！

工藤はあわてて作業に加わる。

木下は狂ったように叫び、作業を急がせる。

工藤はあまりのきつい作業に倒れてしまつ。

木下 なんとというふにゃふにゃ野郎だ。

もう、2年も使ってやってるのにこのだらしなさだ。

お前はここで働かなければ餓死していたところなんだぞ。いつて

みればおれは命の恩人だ。……。

しょうがねえな。よし、みんな休憩だ。

いいか、休んだら今の倍働くんだ。

木下、去る。

工藤、男1、2、トラは座って休む。

男1、2は、たばこを吸い始める。

トラ あんた、大丈夫かい。

工藤 ……はい。

トラ 男のくせにだらしがないね。全く……。

工藤 すみません。

トラ あんた寝てないんだろ。

工藤 ……。

トラ あんたんとこの灯り、昨日も遅くまでついてたじゃないか。

工藤 ……。

トラ こういう仕事してるんだからね、十分寝ないと。

工藤 はい。

トラ なにをやってるんだ？

工藤 なにをって。

トラ だから、灯りをつけてなにやってるんだよ。

工藤 ……本を。

トラ 本？

工藤 読書です。本を読んでいたんです。

トラ ふん。

工藤 この本なんですけど……とても面白いんです。

トラ このくそ忙しいときに本かい。それじゃ倒れてもあたりまえだ。

工藤は本を読みはじめる。

トラ おい。……おい。

工藤 僕ですか。

トラ あんたしかいないだろ。

工藤 はい。

トラ 何の本、読んでるんだ。

工藤 植物の本です。今はちようどてくすの飼いかたのところを読んでいます。

トラ てぐす？

工藤 はい、釣り糸のことです。カイコの繭と同じやり方で取れるんです。

トラ その本は役に立つのかい。

工藤 …… たぶん。

トラ そんなに面白いかい。

工藤 はい。

トラ どうせ、字ばかりなんだろう。

工藤 そんなことないです。図もたくさんあります。

トラ そうか、どれ？（本をのぞき込む）ははあ、

これだったらおれにもわかるな。なにしろ絵ばっかりだもんな。

（笑つ）

あんた、こんな本どこで手に入れたんだ。

工藤 倉庫の奥の木箱の中に入っていたんです。

トラ 倉庫？

工藤 本はこればかりじゃなくて、もっともっとたくさんあります。気象の本、宇宙の本、いろいろとあるんです。

トラ それはおれたちの主人のものだ。見つかったら怒られるぞ。

工藤 そうなんですか。でも僕、もうほとんど読んでしまったから。

トラ あきれた奴だ。

問。

トラ あんた、吸うかい？

工藤 僕ですか。

トラ あんたしかないんだろ。

工藤 僕はいいです。

トラ ふん…あなた、字が読めるんだろ。

工藤 はい。

トラ どこで覚えたのさ。

工藤 父さんが教えてくれました。

トラ おやじさんが。インテリが。

工藤 この森で木の伐採をしていたんです。木こりです。父さんは木こりでも字くらいは読めないといけないって。

トラ それは違うな。字くらい読めなくても仕事はできる。現にそつだろ。おれは字が読めねえけどあんたの3倍の仕事をする。それにいくらべてあんたはふにゃふにゃだ。

字がよめなくなつてやれる奴はやれるんだ。

女だつてそつだ、男より働く奴は働く。そつだろ。

工藤 はい。

問。

トラ あんた、ほかに家族は。

工藤 はい、父さんと母さんとそして妹がいました。

トラ そうか。

工藤 でもこの前の飢饉で、両親は僕たちを捨てて逃げていきました。

トラ 妹さんは。

工藤 わかりません。ある日知らない人が連れていきました。それからずっと会えないんです。

トラ ……しかたねえな。飢饉だったんだからな。おれのところもそうだ。あれからみんなはらはらだ……。

工藤 あ！

トラ なんだよ急に。

工藤 (低い声で)地震です。地面がゆれてます。

トラ 地震だって……ばかなこといつな。

工藤 ほんとうです。僕、分かるんです。

トラ 何をいってるんだ。わけのわからない本ばかり読んでるもんだからそう……。

地鳴りがする。さらにひどくなり地面が揺れる。

トラ なんだ。この揺れは。地震にしては。

工藤 火山だ。火山が噴火するんだ。

辺りが真っ暗になる。

木下が血相を変えて走ってくる。

木下 おい、みんな、もうだめだ。噴火だ。噴火が始まったんだ。

繭はみんな灰をかぶって死んでしまった。

ああ、なんていうことだ。取り入れの時期だというのに。

(工藤に)おい、役立たず。ここに居たかったらいつまでもいるがいい。

こんな土地お前にくれてやるわ。

まったく、なんといいことだ。

みんな、はやいとこすらかるぞ。

工藤を残し、皆去る。

辺り一面火山灰で真っ白になる。

繭から孵化した何万匹の蝶が舞う。

### 3場 野原

霧の向こうに絵里が立っている。

工藤 絵里、絵里じゃないか。

絵里 ……。

工藤 お前のことがずっと気がかりだった。あの男から連れ去られて、そのあとどうなった。ひどいことさねなかったか。

兄さん、お前のことずっと、ずっと心配していたんだぞ。ずっとずっと探してた。

絵里、振り向いてくれ、絵里。

絵里 ……(絵里、振り向かない)

工藤 絵里、見ないうちにはいぶん大きくなったね。さあ、兄さんのところにおいで、さあ。

工藤は山鳩の鳴くまねをする。

工藤 ほっほっ。くっくー。ほっほっ。くっくー。絵里、やってみな。ほら、昔みたいに。

絵里 ……。

工藤 ほっほっ。くっくー。

絵里 ……。

本物の山鳩の音がする。

絵里 兄さんよりあたしの方がうまいわ。

(妖えんに笑つ)

工藤 なに。僕の方がうまいぞ。

山鳩が鳴く。

二人は笑つ。

工藤 ほっほっ。くっくー。ほっほっ。くっくー。

絵里 ……。

工藤 よし、遊ぼっ。

絵里 何をするの。

工藤 陣取りはどうだ、ほらじゃんけんだ。

工藤・絵里 じゃんけんぼん。

工藤 パ・イ・ナ・ツ・プ・ル。

工藤・絵里 じゃんけんぼん。

絵里 チ・ヨ・コ・レ・イ・ト。

工藤・絵里 じゃんけんぼん。

工藤 パ・イ・ナ・ツ。もう行き止まりだ。

二人の大人が遊び、はしゃぐ。

やがて二人は疲れ、木の根元に座る。

絵里 兄さん、ここに何か書いてある。

「カッコウドリトオルベカラズ」

だって。ああ、これ兄さんが掘ったのね。

工藤 そうだよ。

絵里 どういう意味なの。

工藤 それはね、母さんが字の練習をね。それで……ずいぶん

昔のことだからわからないや。

遠くで鈴の音が聞こえる。

工藤 シッ……雨だ。

絵里 雨？

工藤 雨だ。雨がくる。

絵里 雨？こんなにいい天気なのに？

突然、風がふく。

絵里 ……。

工藤 絵里。帰ろう。雨がくるよ。

絵里 ……。

工藤 絵里。

絵里 もう少し、ここで遊んでる。

工藤 どうしたんだ、絵里。濡れてしまっよ。

絵里 ね。いいでしょ、もう少しだけ。

私、雨になんか濡れたっていい。

ここでずっと遊んでいたい。

工藤 ……絵里。だけど。

絵里 家に帰るとまたあの男が来るわ。今日こそ、私たちなをさ  
れるかわからない。



工藤 あの男か。この森を買い占めてる卑しい奴だ。わかった。兄さんが追っ払ってやる。

絵里 本当？

工藤 あいつら僕らの家に父さんや母さんがいないことを知ってるんだ。子どもだけだからって……。

今日こそ、ぎゃふんと言わせてやる。

絵里 でも、相手は大人だよ。

工藤 大人なんかにかけてたまるか。

絵里 ……。

工藤 大丈夫だって。だから。

絵里 兄さんは強いけど、やっぱり大人には勝てないよ。父さんじゃないと。

工藤 ……そうだ。もしかして父さん、帰って来てるかもしれない。さあ。

絵里 いや。まだ遊ぶの。

工藤 絵里、言うことを聞きなさい。いい加減にしないと兄さんおこるぞ。

絵里 父さんたち、帰ってなんかこないわ。

工藤 帰ってくる。

絵里 帰ってこない。

工藤 きっと帰ってくる。

絵里 帰ってこないわ！絶対に帰ってこないのよ。兄さんは知らないだけのの。

工藤 黙れ、黙らないと本当にぶつぞ！

絵里 兄さん、あたし、聞いたの。

聞いたのよ。父さんたち帰ってこないの。

工藤 なに！

絵里 私たちが寝てる間に、父さんと母さんが、話してるの私、聞いたの。

父さんが「森へ遊びにいってくる」って行って家を出ていった日があったでしょ。あの前の晩のことよ。

もう家には食べる物もなにもないから私たちはどこか遠くへいきましょうって。

子どもたちは自分たちでなんとかするだろうって。

そっいつた。

工藤 それ、父さんがいったのか。

絵里 母さん。

工藤 そんな。母さんが僕たちを見捨てるはずがない。

絵里 父さんは、仕方ないなってしたをむいてた。

工藤 ……絵里。こんな大切なことどうしていままです。

絵里 だから、父さんも母さんも帰ってこないわ。私たちは、私たちが……。

工藤 ちがう、僕たちの食料を探しに、街にいったんだ。

絵里 街はもっとひどいのよ。食料なんてないわ。だって私たちより先に学校に来なくなったのは街の子だったでしょう。

工藤 嘘だ、父さんはこの村でも一番の木こりなんだ。そんな人が僕たちを捨てるはずない。

問。

雷の音。

絵里 ……お腹すいた。

工藤 ああ。

絵里 ……。

工藤 そうだ。こならの実があるんだ。

工藤、ポケットからこならを取り出してなめる。

工藤 さあ、絵里もお食べ。これだって食べようと思えば食べられるんだ。

絵里 (なめる)

工藤 お腹がいっぱいになった気がするだろ。

絵里 うん。

霧が深く立ちこめる。

雷鳴とともに、人さらいが浮かび上がる。

人さらい おや、坊ちゃんたち。そんな物を食べてるのかい。それはいけない。そんなもの食べるとお腹をこわしてしまうよ。

さあ、これを食べるんだ。

工藤 あなたは？

人さらい 私はこの辺の飢饉を救つために来た者だ。さあ、食べるんだ。食べるんだ、さあ。(パンを差し出す)

工藤は、パンを手に取りしばらくそれを見つめているが、無我夢中で食べ始める。

人さらい お前たちはいい子だ。しかし、いい子だというだけではなんにもならん。わしと一緒においで。もっとも男の子は強いし、わしも二人は連れていけない。

おい、女の子、おじさんと一緒に町にいこう。毎日、パンを食べさせてやるよ。

人さらいは絵里を連れていこうとする。

工藤 妹になにをする！

人さらい うるさいガキだ！

人さらいは工藤の腹を蹴る。

雷がなり、雨が激しく降り始める。

工藤 う。(ひざまづく)

人さらい さあ、女の子、こっちにくるんだ。

絵里 いや。

人さらい 私はお前を助けに来てやってるんだ。

絵里 兄さん、助けて！ 助けて！

人さらい これ以上騒ぐと、痛い目にあわせるぞ。

人さらいは笑いながら泣きさげぶ絵里を肩に担いで連れていく。

工藤 ……どろぼう。どろぼう。

工藤は地面に倒れる。

工藤 絵里！ 絵里！

遠くで声が聞こえる。何か言い争ってるようだ。

玄造 小夜、おれはやるぞ。今年はいつもの3倍の米をとってやる。

小夜 やめろ。やめてくれ。

玄造 いいや、やめない。

二人の音が近づく。

#### 4場 道

玄造とその妻、小夜が登場。

小夜 あんた、おねがいだ。やめろっていったらやめるもんだ。そ

んなに肥やしをうんといれて、糞はとれるかもしれんが、実は一粒も取れるもんじゃない。

玄造 いや、俺の見込みでは、今年は今までの3年分暑い。1年で3年分とって見せる。

小夜 やめろ。やめろったら。

玄造 花はみんな埋めてしまったから、今度は豆玉を60枚入れてそれから鳥のかえし、100段入れるんだ。

小夜 あんた、もう山師は止めてくれ。

玄造 いいや、止めない。

小夜 あんた。・・・(工藤に気がつき) あんた。

工藤が倒れている。

小夜 あれ、みて。

玄造 (側により) おい、若いの、大丈夫か。

玄造は工藤の頬をたたく。

工藤、気がつく。

玄造 お前、こんなところで。俺らが通らなかつたら凍死していたとこだぞ。

小夜 どうだい。

工藤 ……。

玄造 お前、だいじょうぶか。

小夜 大変だ。体が冷えてるよ。

玄造 よし、ちょっとみててくれ、俺はお湯をとってくる。

玄造、去る。

小夜 ほら、しっかりせんか。こんなところで眠ると死んじまうぞ。

工藤 …… 絵里 …… 絵里！

絵里！ どこに行った。

小夜 絵里？

工藤 絵里！

小夜 あんた狐にばかされたな。このあたりは昔からよっけでるんだ。

工藤 絵里。もう、ずっと探し続けてるんです。それが、今やっと会えたんです。

小夜 ここですか。

工藤 はい。ここです。

小夜 ここはな。我々のほかに人なんて住んでおらん。いるのは獣くらいだよ。あんた、やっぱり狐につままれてるよ。

何年か前もそうだった。村の若者がここで倒れて死んどった。いや、あたしがみつけたときはまだ生きとったよ。虫の息だったかね。そう、あんたと同じように女の名前をさけんどった。

まったく若いのに女の名前を叫んで。

工藤 違います。絵里は妹の名前です。

小夜 そうかい。まあ、それより、あんた、大丈夫かい。

工藤 ええ、疲れてしまつて。つい。

小夜 どこから来た。

工藤 あの山の向こうです。

小夜 なにしに。

工藤 仕事を探しに来たんです。

小夜 歩いて来たんか。

工藤 はい。

小夜 それは驚いたな。あそこの村はこの前の噴火で埋まつたと聞いているけど。

工藤 はい。あたり一面火山灰で覆われてしまいました。

小夜 そうか。それはひどいな。それじゃあ農作物はすっかり駄目だな。それであんた何しに来たんだっけ？

工藤 あの。ですから・・・。

小夜 ああ、仕事を見つげにきたんだったな。

工藤 はい。

小夜 あいにくうちの村もそんなに裕福なものはないよ。人が雇える家なんてめつたにない。

工藤 そうなんですか。

小夜 まあ、飢饉のあとだからな。仕方ないよ。

工藤 ……。

小夜 そんなに落ち込むなって。なんとかなるよ。そうだ。こうなつたら運試しだ。吉とでるか凶とでるか。うちの亭主のところまで働いてみるか。もちろんあんたがよければの話だが。

工藤 ほんとうですか。

小夜 ひと使いはそうとつあらいよ。

工藤 構いません。なんでもします。

小夜 そんなら、今すぐここにくる。話してみるといい。

工藤 ありがとうございます。

小夜 ちょっとまつた。まだいうことがある。うちの亭主はここらじゃ一番の百姓だがな。山師だぞ。それでもいいのかい。

工藤 山師？

小夜 一か八か、バクチの様な農業の仕方をしてるんだ。それを山

師といつてな。

とれるときは普段の何倍もとれるが、失敗するとまったく収穫なしだ。それでもよければの話だ。

玄造が走ってくる。

玄造 おう、お前。若いのは大丈夫か。

小夜 あんた。

玄造 (妻に) これでこいつの体を拭いてやれ。

小夜 はい。すっかり凍っちまってる。

小夜、工藤の体に手をかける。

工藤 あの、先ほど奥さんから聞いたのですが。

玄造 ん？

工藤 僕を使ってくれませんか。

玄造 え？

工藤 僕、一生懸命働きます。山師でもなんでもします。だから、僕を雇ってください。

玄造 なんだ。こいつ元気じゃねえか。小夜、俺のこといつの間にか話したな。(笑う)

工藤 お願いします。仕事を探してるんです。僕、身寄りも何もありません。このままだと飢え死にしています。

玄造 まあ、何だな。。

工藤 お願いします。

小夜 あんた。

玄造 おれは人使いが荒いぞ。

工藤 聞いてます。

玄造 山師だぞ。

工藤 わかっています。

玄造 ……よし、お前に馬のさせとりをたのもつか。

工藤 させとり？

玄造 田んぼを耕すんだよ。できるか。

工藤 はい。ありがとうございます。

玄造 そうか。

それではまず、のるかそるか、秋までやってみてくれ。まあ、いこう。ささげの蔓(つる)でもいいから手伝いを頼みたいとおもってたところだ。

工藤 ささげの蔓ですか。

小夜 猫の手もかりたいってことよ。(笑う)

工藤 はい。

玄造 よし、こい。

工藤 はい。

玄造 そうだまだ名前をきいてなかった。

工藤 工藤です。工藤一（くどうはじめ）といいます。

玄造 そうか、一か。よろしく頼むぞ。

俺は玄造って言うんだ。この辺じゃ赤髭で通ってる。その名の通り赤い髭をしているからなんだが、しかし、前々から赤かった訳じゃない。どうして赤くなったかと言うとな。昔、新しい肥料の研究をしていたときにな。過酸化水素水を使ってな。オキシドールだ。そしたらすっかり髭の色がかわってしまっただ。笑つ）

こいつは俺の妻だ。小夜というんだ。

工藤 お世話になります。

工藤、玄造、小夜去る。

## 5場 工藤の夢

少女が泣いている。スカートの裾は裂け、ブラウスのボタンも取れている。

工藤 君、どうしたの？ 何かあったの？

絵里 ……。

工藤 絵里、絵里じゃないか。

絵里 ……。

工藤 どうした。ひどい目にあったのか？

絵里 ……。

工藤 どうした。絵里、答えてくれ。

絵里 ……。（後ずさりする）

工藤 絵里、兄さんだよ。怖くない。

な、逃げないでくれ。

絵里 （恐怖にふるえる）

工藤 （絵里に近づく）

絵里 （過剰なまでに怖がる）

工藤 絵里、何があったんだ。絵里！

絵里、消えている。

6場 玄造の家

玄造がひどく落ち込んでいる。

玄造 一、大変だ。

工藤 何かあったんですか。

玄造 病気だ。これはひどい。

工藤 病気ですか。早く医者に行った方が。

玄造 違う、俺のことじゃない。オリザのことだ。オリザが病気になるだ。

工藤 稲がですか。

玄造 そうだ。これを見る。(稲を差し出す)赤い点々が見えるだろ。

工藤 ……。

小夜が血相を変えて走ってくる。

小夜 あんた。オリザに病気がでたっていうのは本当かい。

玄造 ああ、ほんとうだ。ほとんどやられてしまった。今年はまだ、一粒の米もとれない。

小夜 なんとかなんないのかい。

玄造 ああ。ならない。

小夜 石油は流したんか。

玄造 石油？

小夜 オリザの腰まで石油でつけて病気を蒸し殺すんだ。

玄造 ああ、そうだな。

小夜 どうしてやらねんだ。

玄造 それは去年やったからな。

小夜 今年もやればいいだろ。

玄造 今年は駄目だ。

小夜 なしてだ。

玄造 となりがうるさいんだ。

小夜 となりってあの爺さんか。

玄造 そうだ。ほら、石油を流したはいいが、その後が問題だ。残った石油を捨てないといけない。どうしても隣の田んぼに流れてしまつ。

小夜 そりゃ去年もそうだったじゃないか。

玄造 そうだ。去年は爺さんをなんとかいいくるめた。が、今年も駄目だ。

小夜 なげだ。



玄造 さつき、俺が石油を流そうとしたらすごいけんまくだった。  
小夜 どうしてだろう。

小夜 さあ、とにかくすごいけんまくだ。ありゃ駄目だ。

小夜 なんとかいってたのめばいいだろ。

玄造 なんていうんだ。

小夜 石油は肥やしになるとかいつてさ。油にはかわりないんだから。

玄造 それは去年使った手だ。今年は・・・。

小夜 去年は、それで納得したんだろ。どうして今年は駄目なんだ。

玄造 どうやら、爺さん石油がこやしにならないことを知ったらしいな。

小夜 だれか入れ知恵したんか。

玄造 おそらくそうだ。誰かが爺さんについてたんだ。

小夜 よけいなことをする奴がいるもんだ。

玄造 いったいだれだろ。そんなことするのは。

小夜 この辺でそんなことする奴と言ったら・・・。見つけたらただじゃすまさんぞ。

玄造 まったくだ。

工藤 あの。

玄造・小夜 ？

工藤 僕なんですけど。

玄造 え？

工藤 爺さんに石油のことを教えたのは僕です。

小夜 あんたがが。

玄造 一か。

玄造、小夜、落胆する。

工藤 すみません。でも、石油が肥やしになるわけないし。おじいさん、去年僕たちが流した石油が田んぼからはけなくて困ってたから。

小夜 ……。

工藤 すみません。こんな事になるとは。

玄造 まあ、石油が肥やしにならないことは事実だからな。しかたない。

小夜 ……あんた、なんとかなんないのかい。

玄造 そうだな。

小夜 ようするに石油が隣に流れないようにすればいいんだろ。

玄造 しかし、どうしても隣の田んぼの方がひくいからな。どうしようもないな。

問。

玄造 …… そうだ。燃すんだ。燃すんだよ。

小夜 燃す？

玄造 石油に火をつけるんだ。そうすれば石油は燃えてなくなる。

それに火を放てばどんなにつよい病気でさえもいなくなるだ。一石二

鳥だ。よし、一、田んぼにでるぞ。

小夜 なちなよあんた。

玄造 一、はやくせんか。

工藤 あの。

小夜 まちな。そんなことしたら、オリザが全部灰になっちまうよ。

玄造 オリザに火がつく前に消せばいいんだ。

小夜 そんなことできんのか。

玄造 やってみないとわからんだろが。

小夜 わかるよ。あんた石油だよ。油に火をつけたら水をかけても

火は消えんよ。

玄造 あ……。でもオリザの病気が死ぬのは確かだ。

小夜 病気が死んでもオリザが死んでしまっってはしょうがないじゃ

ないか。

玄造 ……。

玄造、寝ところがる。

小夜 なんとかなんないのかい！

玄造 どうにもならないね。すっかり5年前の通りだ。

小夜 あんた。だから山師はやめろって言ったんじゃないか。(お

いおい泣き始める)

玄造 このあたりで指折の老百姓で通ってる俺がこんなことで参る  
か。

よし、来年こそやるぞ！

一、お前、俺の家に来てからまだ一晩も寝たと言っくくらい寝たこ  
とがないな。

さあ、五日でも十日でも、ぐうと言っくくらい寝てしまえ。

そのかわり今年の冬はそばばかり食っんだぞ。お前、そばはすき  
だろつが。

工藤 はい。

玄造 よし、わかったら寝ろ。

工藤 はい。

玄造 ぐうと言っくまで何日も寝てしまえ。小夜！ いつまでもめそ

めそするな。

来年はいつもの3倍はとってみせる。

早く寝ろ。寝てしまえ。

小夜（泣いている）あんた、こんなときに寝られるわけがないだろう。

玄造 ええい。どうしても寝られんか。よし、それだったらおれが先に寝る。一。はやくせんか。お前もだ。

玄造、横になる。小夜は未だ泣いている。

工藤 あの。僕がなんとかしましょうか。

玄造 お前に何ができるんだ。

工藤 できるかどうかわかりませんが。ちょっと試したいことがあるんです。

玄造 何か思いついたか。

工藤 本で読んだんです。稲の病気を殺す方法です。やってみる価値はあると思います。

玄造 どうするんだ。

工藤 塩と灰を用意できますか。

玄造 塩と灰？

工藤 はい。塩化ナトリウム食塩です。それから……。

7場 街の中

汽車の音。駅のアナウンス。

ざわざわとした人通り。バスのクラクションの音

工藤、旅行者の格好をして地図をみながら歩く。

工藤（無対象に）すみません。大久保農学校はどちらかわかりますか。

……そうですか。

工藤、汗をふく。

工藤（無対象に）すみません。大久保農学校へはどう行けば……  
……ありがとうございます。ここをまっすぐです。

工藤、前方に絵里がいるのに気がつく。

絵里はマッチ売りの格好をしている。

絵里 マッチはいりませんか。マッチはいりませんか。

工藤 絵里……。絵里。

絵里 マッチはいりませんか。

工藤 絵里、僕だよ。絵里。

絵里 ……。

工藤 絵里、ずいぶんさがしたよ。

絵里 ……。

工藤 そうか、この町にいたのか。マッチを売ってるんだね。絵里、

僕だよ。兄さんだよ。

絵里 ……。

工藤 絵里！

工藤、絵里に向かって走る。

車のクラクション。絵里を見失う。

ふと、みると派手な服を着た娼婦が立っている。彼女は絵里なのだがそれに気がつかないほど見違えている。

工藤 ……すみません。人違いです。(その場を去ろうとする)

絵里 ちょっとあんた。待ちなよ。

工藤 はい。

絵里 あんたさ。見かけない顔だね。

工藤 この町にはたった今ついたばかりで。

絵里 そうかい。ここには何をしに。

工藤 学校に行くんです。それから仕事を探しに。

絵里 ふっん。学校にね。あんた金もってるのかい。

工藤 ……。

絵里 学校に行くなら金が必要だよ。持ってるのかい。

工藤 はい。少しなら。

絵里 そうかい。そうならそうと早く言えばいいのに。

工藤 あの……。僕、急ぎますので。

絵里 まちなよ。町に来た記念にさあ。遊んでいこうよ。

工藤 あの。

絵里 ここは田舎とは違うんだ。刺激がいっぱいある。そうだと。

せつかくここまで来たんだからさ。遊ばなきゃ損だろ。なあ、あ

たしと遊んで行こうよ。

いいだろ。(工藤のそばに寄りついて息を吹きかける)

工藤 僕、困ります。

絵里 あんた、まだ女を知らないんだろ。

……。いいわ。あたしが男にしてあげる。

ふうん。よくよくみるといい男じゃない。

あんた私の好みのタイプよ。(工藤の体に触れ誘惑する)

ふうん。ほら体が素直に反応してるよ。いいわあたしにまかせなさい。悪いようにはしないから。

工藤、誘惑に屈しそうになる。

しかし、突然絵里を突き飛ばし、逃げようとする。

工藤 やめてください。僕は僕は。

絵里 畜生、なにしゃがるんだ！

人が優しくしてりゃ調子にのりやがって！

こっちはな。こつ何年も飢饉が続いてな。商売あがったりなんだよ。

こつなったら腕すくでも金をおいていってもらうよ。

工藤 すみません。勘弁してください。僕はこれから……ああ(頭を押さえる)

工藤、急に苦しそうにうずくまる。

絵里 なんだよ。わざとじゃないのか。

工藤 ……ああ。(苦しがる)

問。

絵里 あんた。だいじょうぶかい。

工藤 ああ、飢饉は、飢饉はまだ続いているのですか。

絵里 困ったな。こんなところで。誰か！ 誰かいないのかい！

工藤 ああ。

絵里 誰か！ 病人なんだよ！

## 8場 玄造の家

工藤、玄造、その妻が深刻な顔をしている。

玄造 いいが、一。おれは今までこのあたりじゃちよつとは名のしれた大百姓だったし、いままですいぶん稼いでも来たのだが。

しかし、こつたびたびの寒さとかんばつのためにいまでは沼ばたけも昔の3分の1になってしまった。来年はもう入れる肥やしも

ない。俺だけではない。  
来年までもに肥料を入れられる百姓はこの村には一人もおらん  
だ。

さすがの俺もお手上げだ。

俺は山師として沼畑に石油を流したりして  
オリザの病気を防いだりしたが、やはり人間の力というもの  
はと  
てもちつげなものだ。

いくら俺たちが寒さに強いオリザを作ったとしてもこう寒いと  
も  
うぐつじようもない。

こういふときはおろおろ歩いてただただ耐える、それが百姓なん  
だ。

自然に対して俺達百姓ができることといえば、一つづつ地道に工  
夫して行く。ただそれだけだ。

・・・

だからな。こういふあんばいではいつになってもお前に働いて  
もらった礼をするというあてがない。

お前も若い働き盛りをおれのところで暮らしてしまつてはあまりに  
気の毒だ。

ここにわすかばかりだが、着るものと金を用意した。これを持  
つてどこか運のいいところを探してくれ。

工藤

小夜 工藤さん、6年もの長い間。この人につき合ってくれてあり  
がとう。この人はね、あなたが一生懸命働いてくれたてうれし  
か  
つたと思つんよ。

この人もあたしも、あんたを死んだ息子だと思つてかわいがつて  
きたから、別れるのはほんとうにつらいよ。

玄造 一、これを持っていつてくれ。

工藤 これは・・・大久保博士の本。

玄造 お前、この本がすごく気に入っていたらう。これをお前に  
や  
る。

工藤 この本は、確か。

玄造 そうだ、息子の形見だ。

工藤

玄造 お前がこの本を読んでくれたために、俺はずいぶん助かつた。  
俺  
だけじゃない、この辺りの百姓はみんなお前に感謝してる。

3年前はオリザの病気を治してくれた。たしか、木の灰と食塩を  
使  
つたんだつたな。

それにオリザの品種改良が成功して冷害に強くなった。俺は山師  
で、  
字もあんまりよめんし、こんなもん持つていても宝の持ち腐  
れだ。  
お前のように、学問のできるものがこの本を持つべきだ。

工藤 ……。

玄造 いままでありがとう。

工藤 玄造さん、お礼をいうのはこっちのほうです。僕はほんとうはまだここで農業をやっていたい。玄造さんやおかみさんと一緒に働いていたい。

小夜 一、遠慮せんでもええ。私は知つとるんよ。お前、その本を書いた大久保博士の学校にいきたかつたんだらう。

玄造 そうだ一。去年、町に使いに行かせたとき、大久保農学校に立ち寄つたらう。

工藤 どうしてそれを。

小夜 6年も家族同様に暮らして来たんだ。あんたのことなどすべてお見通しだよ。

玄造 おれはな。農学校がどついつところか見に行けるようにわざと町へのお使いをさせたんだ。

工藤 そうだつたんですか。

小夜 あんたは、もつともつと勉強して、この村、いや、国中の百姓を助けておくれ。そういう人なんだよあんたは。

工藤 おかみさん。

玄造 そうだ、一生懸命勉強して、俺達を救つてくれ。お前にならそれができる。お前は俺達とちがつて選ばれた人間なんだからな。そうだ、一。お前は俺達百姓の救世主になるんだ。

工藤 救世主ですか。

玄造 そうだ。救世主だ。そして死んだおれの息子の分までがんばつてくれ。

大久保農学校は学費も安いし、その金を持っていけば何とか働きながらも勉強できる。息子もその学校に行くため一生懸命勉強していた。それが…。

工藤 玄造さん。

玄造 さあ、行け。早く行つてくれ。別れがつらくなる。

工藤 ありがとう。このご恩は一生忘れません。いつか、きつともどつて来てお役にたてます。

小夜 さあ。

小夜は泣く。玄造も目に涙をためている。

工藤 さよつな。

小夜 一！

工藤、出てゆく。

9場 大久保農学校

工藤、大久保博士。

大久保 工藤君、工藤一君。君が最後だね。それでは卒業できるか否かの判定だ。どれ、ノートを見せてもらえん。

工藤は大久保にノートを見せる。

大久保 ほつ、この図は非常に正しく書けている。君は私の講義を聴いてどれくらいになる。

工藤 はい、農学校に通い初めて、2年です。

大久保 2回目か。それなのにこの図は・・・どこかほかで勉強したのかね。

工藤 独学です。大久保博士の本を何度も読み返しました。

大久保 ふうん・・・では、問題に答えなさい。工場の煙突から出る煙はどついう色の種類がある？

工藤 黒、褐（かつ）、黄、灰、白、無色、それからこれらの混合です。

大久保 （笑つ）ははは、無色の煙は大変いい。次は形についていたまえ。

工藤 無風で煙が相当あればたての棒にもなりますが先はだんだん広がります。

雲の非常に低い日は棒は雲まで昇って行ってそこから横に広がります。

風のある日は棒は斜めになりますがその傾きは風の程度に従います。

波やいくつもきれになるのは風のためにもありますが一つは煙や煙突の持つ癖のためです。あまり煙の少ないときはコルク抜き形のにもなり煙も重いガスが混じれば煙突の口から房になって一方ないし四方に落ちることもあります。

大久保 （笑つ）ははは。よろしい。合格だ。君にびつたりの仕事がある。紹介しよう。

沢村君。沢村君！ 入りたまえ。

沢村、入ってくる。

大久保 今度、君のところにあずける私の生徒だ。

工藤 工藤です。工藤一です。



沢村 私は火山局の主任技師、沢村と申します。どうかよろしく。

大久保 沢村君、この子はね。我が校始まって以来の優秀な生徒だ。どうかこき使ってやってくれ。

沢村 わかりました。

工藤 よろしくお願いします。

大久保 そうだ。簡単に彼に火山局の仕事の内容を説明してやってくれ。

沢村 はい。

この仕事は、実に責任のあるものです。それに半分はいつ噴火するか分からない火山の上で仕事しなければなりません。というのは火山の癖というものはなかなか学問で分かることではないからなんです。

だからあなたには実際に測候所に寝泊まりしてもらって火山の活動を体験してもらうことになります。あなた、体は丈夫ですか。

工藤 はい、ここにくるまでの6年間ずっと農業をしていました。

沢村 そうですか。それなら頼もしい。我々は頭でっかちではないけません。実際に自然を体で感じなくては本当のその意味はわかりません。

工藤 はい。

沢村 このちようど裏の建物が火山局になります。この建物は、国中のすべての活火山や休火山につながっています。それらの火山の煙や灰、溶岩の様子はもちろん、見かけはじつとしている古い火山でもその中の溶岩やガスの模様から山の形の変わりようまで、みんなここにデータが送られてきます。そして、数字や図になったりして表示されます。

火山局の建物はいわゆる一局集中のセンターになっているというわけです。

工藤 はい。

沢村 詳しくは明日、建物をまわりながら説明しましょう。君は今日から火山局の職員です。今晚から泊まることを用意してあります。そこでゆっくりお休みなさい。

工藤 はい。なにもかもありがとございます。

大久保 どうだ。工藤君、やれそうかね。

工藤 はい、一生懸命、働きます。

大久保 働くだけじゃいかん。君はまだまだ知識が不足している。夜は必ず私の講義を受けて勉強を怠ることのないようにしなければね。

工藤 はい。

大久保 よし、さがっている。

工藤 失礼します。

沢村 君、廊下でしばらくまっついていてくれ。

工藤 はい。

工藤 去る。

大久保 どうだね。彼は。まじめそうない子だろう。

沢村 はい。

大久保 彼は私の歴史の歴史という模型の意味が分かっていた。

沢村 歴史の歴史？（非常に驚く）博士のあの模型をですか。

大久保 私は、こんな生徒はいままでみたことがない。

沢村 私はあれを理解するまで10年はかかった。

大久保 そうだろう。私だつてあの模型をつくるまで30年はかかったよ。（苦笑）

沢村 それがわずか2年ですか。

大久保 彼はな。1を聞いて10を知るタイプ、いや、100を知るタイプだ。それに彼の感はするどい。まるで獣（けもの）のようだ。

沢村 獣、ですか。

大久保 そうだ。動物的な感が働くんだよ。人間にはない動物特有の直感だな。

ほら、私はよく飛行船に乗るだろう。いつだったか、講義が終わり、どれうちまでひとつ飛びと思ってバーナーに点火していたんだが。彼が血相を変えて私のところにくるんだ。そしてな。

「博士、もうすぐ嵐になります。飛行船に乗るのはやめてください」って言っただ。

あまりに真剣につつたえるもんでね。それでしかたなく、彼の言うとおりに汽車で帰ることにした。するとどうだろう。

汽車に乗ってしばらくすると辺りは急に真っ暗になって、まだ3時だというのに夜のようになっちゃった。

積乱雲が発生して、雷が鳴り、ひょうまでまで降ってきた。もし飛行船に乗っていたらと思うとぞっとしたよ。

沢村 彼に、工藤君に助けられたって訳ですね。

大久保 そうなんだ。彼は私の命の恩人だ。大げさでなしにね。

沢村 しかし、なぜ彼は嵐が来るのを予測できたんでしょう。

大久保 それなんだよ。彼に聞いてみたんだ。

沢村 工藤君はなんと？

大久保 それが・・・妙なことをいうんだ。時々、天から声のようなもの聞こえるからね。

沢村 天から声が？そんなこと。

大久保 しかし、現に私は彼から助けられた。その工藤君が天の声を聞いたと言ってるんだ。ばかばかしいかもしれないが信じないわけにはいかないだろう。

沢村 はあ。

大久保 ははは、まあ、変わった子だよ。よろしく頼むよ。

では、私はそろそろ家に帰るとするか。

沢村 今日は飛行船ですか。

大久保 いや、今日は歩いて帰る。午後は雨になるらしい。

沢村 それも彼が言ったんですか。

大久保 ははは、違うよ。気象台の発表だよ。

じゃあ、私は失礼するよ。

沢村 おつかれさまです。

大久保 去る。

10場 火山測候所その1

ブザーが激しくなり、地響きが聞こえる。

沢村があわてて入ってくる。

工藤、そして、白衣を着た研究員1、2が忙しそうに作業をしている。

沢村 工藤君、第17火山は今朝までなにもなかったね。

工藤 はい。いままで第17火山の働いたのをみたことがありません。

沢村（計器をみながら）ああ、これはもう噴火が近い。今朝の地震が刺激したんだ。

この山の北10キロのところには市街地がある。今度爆発すればたぶん山は3分の1、北側をはね飛ばして牛やテーブルくらいの岩が暑い灰やガスと一緒に大量に町の中に落ちてくるだろう。

地鳴りがする。

沢村 どうした。工藤君、怖いのかね。

工藤 はい、いや。

沢村 ははは。君は運がいいよ。ここに来てわずか数ヶ月でこんなところに遭遇できたんだからね。

工藤 はい。

沢村 さて、この地図をみたまえ（地図を広げる）

どうしても今日中にこの海に向いた方へボーリングを入れて傷口をこさえて、ガスを抜くか溶岩を出させるしなければならぬ。君、データを見せたまえ。

研究員2がデータ用紙を沢村に手渡す。

沢村 ありがとう。・・・君はこの山、第17火山はあと何日くらいで噴火すると思う？

工藤 十日ももたないと思います。

沢村 十日？冗談じゃない。あと三日ももたない。

はやく工作してしまわないと取り返しのつかないことになる。

工作隊の派遣を要請しないと。

(電話をかけようとする)

工藤 先生、それはもうすでにしてあります。

沢村 そうか。さすが工藤君だ。

工藤 沢村先生。

沢村 ん？

工藤 腰を落として、足をしっかり踏ん張ってください。みなさん！

しっかりとまっすぐください！

沢村 なんだ。どうしたんだ。

工藤 (静かに) いいですか・・・もうすぐ大きな揺れが来ます。

沢村 どうしてそんなことがわかる？

工藤 感です。僕、小さい頃から感だけは当たるんです。さあ、構

えて。

沢村 あ、ああ。

ドンという爆弾が落ちたような衝撃がある。

全員、地面に転がる。

沢村 大丈夫か。工藤君。

工藤 ええ。先生こそ大丈夫ですか。

皆、お互い無事を確認し、そして笑う。

沢村、双眼鏡で窓から外を見る。

沢村 思ったより噴火が早くなりそうだな。早いところ作業を終わらせてここを撤廃しよう。

工藤 はい。・・・あれ、先生、あれはなんでしょう。

沢村 どこだ。

工藤 ほら、あの空に浮かんでる、風船のような。

沢村 (目をほそめながら) どれ、・・・博士だ。工藤君、あれは  
大久保博士の飛行船だ。こっちにやってきた。予定よりずいぶん  
早いな。(時計をみる)

工藤 また飛行船ですか。ここは危険なのに。

沢村 なあに大丈夫だ。博士のことだ。気流の動きと早さも計算済  
みだろう。

それより、工藤君。あそこに溶岩の層が二つしかない。あとは柔  
らかな火山灰と火山れきの層だ。それにあそこまでは牧場も道も  
立派にあるから材料を運ぶこともたやすいだろう。

工藤 はい。私もそう思っています、午前中に工作隊にそのように指  
示を出しました。

沢村 そうか?・・・まいったな。

さすがは大久保博士の秘蔵っ子だ。もう私が教えることはないよ  
うだな。

工藤 先生、やめてください。私はまだまだ先生のもので。

沢村 冗談だよ。冗談。(双眼鏡をみながら) あそこにいる人達が  
工作隊だな。

工藤 はい。そうです。

沢村 工作隊といっても半分決死隊だな。私は今までにこんなに危  
険に迫った仕事をしたことがないよ。・・・。  
作業はすぐに終わるのかね。

工藤 はい。あと1時間もかからないと思います。この測候所に電  
源がくれば後はこのスイッチを入れるだけでダイナマイトと連  
動します。

沢村 そうか。それなら十分間に合う。

安心したよ。・・・。

とにかく工藤君、一つ茶でもわかして飲もうではないか。

あんまりいい景色だから。

ほら、あちらには海が見える。

工藤 はい。

工藤、お茶をアルコールランプでわかす。

沢村 ほう、美しいな。太陽光線がきらきらと反射している。

大久保博士が現れる。

大久保 お茶をよばれにきたよ。

工藤 博士!

沢村 博士、お待ちしました。

大久保 どうだね。ここは揺れるかい。

工藤 落石がかなりあります。この場所も危険になりました。

沢村 いやまだ、大丈夫でしょう。揺れの方は、そんなに激しくは  
・・・。

激しく、揺れる。皆周りにつかまって耐える。

大久保 ふう、やっとおさまったな。また寿命が縮まったよ。

さて、お茶は。

工藤 あ。

ランプとお茶がこぼれてしまっている。

研究員2、こぼれたお茶をふく。

大久保 ははは。せつかくのティータイムが台無しだ。

工藤 もう一度わかします。

研究員1 (データをみながら) 今のは私たちの足下から北へ1キロ。地表下約七百メートルのところでこの小屋の6、7十倍くらいの岩の塊が溶岩の中へおちこんだようです。

大久保 沢村君、ダイナマイトにはいつスイッチを入れられる。

沢村 間もなくです。工作隊の作業が終了すればここに電話があるはずですよ。

大久保 ならばもうすぐここからシヨウがみられるのか。

沢村 はい。うまくいけばですが。

大久保 それは楽しみだ。

ほんとならばあと10日もほっておけば大噴火をみることになるんだろつが、そうなると大惨事だからね。

今回の作業は、溶岩の流れを変えるだけだから、噴火の規模は少々小さくなるが、  
ここからみるとそれはすごい迫力になるはずだ。

工藤君、しっかり体験したまえ。滅多にないチャンスだぞ。

このシヨウがみられるのは我々火山局のメンバーだけにゆるされた特権だからな。

工藤 はい。

大久保 そうだ。沢村君。

沢村 はい。

大久保 もう、どうしても来年は潮汐発電所を全部作ってしまわなければならぬ。

先ほど、私のところに予算の認可の通知が届いた。

沢村 そうですか。それはよかった。

大久保 それができれば今度のような場合でもその日うちに仕事ができるし、工藤君が言っている沼畑の肥料も降らせることができる。

沢村 となると干魃(かんばつ)の年でも。

大久保 そうだ。まったく心配ない。

沢村 まるで夢のようだ。

大久保 工藤君、肥料を空から降らせる件。実行段階に切り替えなさい。

今度は君が指揮者だ。

工藤 僕がですか。

大久保 どうした、うれしくないのか。

工藤 指揮をとるなんて初めてです。すこし不安です。

沢村 勉強だよ。がんばりたまえ。

今回の第17火山の制御の様子をみたって君はもう十分一人前だ。私が保証する。

工藤 でも。

大久保 まったくひとりでやれといっているわけではない。もちろん私も沢村君も手を貸すし、分からないことは何でも相談すればいい。どうだ、やれるか。

工藤 ……はい。

大久保 そうか。ではまかせろぞ。

工藤 はい。精一杯がんばります。

大久保 ……お茶、沸いたかな。

研究員2、お茶をもってくる。

大久保 お、ありがとう。では今回の成功を願って、前祝いの乾杯と行きますか。

3人、ティーカップで乾杯し、笑う。

電話が鳴る。

研究員1がとる。

研究員1 はい。…分かりました。工作隊撤退ですね。

(沢村のところに行く)主任、発破の準備ができました。

沢村 そうか。ありがとう。(電話で)

はい、沢村です。…。

こちらで安全を確認した後、直ちに発破します。

…はい。では後ほど。

大久保 どうだ。

沢村 作業が終わったようです。いよいよ発破です。工藤君、発破  
地点付近に人や動物等がないかすぐに確認してくれ。

工藤 はい。(窓に向かって双眼鏡をみる)

問。

工藤 はい。肉眼で安全を確認できました。  
発破してよろしいかと思われませう。

沢村 よし。では、センターに連絡する。  
(電話をかける)

沢村です。ただいまから発破します。  
警報をおねがいします。

遠くで警報のサイレンが鳴る。

沢村 よし、いいだろう。工藤君、スイッチをいれてくれたまえ。

工藤 はい。では、点火します。  
点火！

沢村 点火！  
研究員1・2 点火！

工藤、スイッチを入れる。  
3人は双眼鏡を覗く。

問。

沢村 どうした。なにもおこらない。  
大久保 失敗か。

沢村 どこかで接触不良を起こしたんでしょう。  
大久保 沢村君、工作隊のやり直しを。

沢村 はい。  
工藤 まってください！ まってください。  
・・・・僕には分かるんです。自然の鼓動が。僕には聞こえるん  
です。

大久保 ……  
工藤 来ます。……  
もうすぐ…

地鳴りがする。  
窓の外が明るくなり、大きな音がする。



沢村 やった。

研究員1 成功だ。

大久保 美しい。

沢村 (双眼鏡を覗きながら) 溶岩は計算した方向に流れていく。

これで町への被害が防げた。

工藤 ……。

大久保 おめでとう。成功だ。

沢村 (工藤に) おめでとう。

研究員1・工藤 おめでとうございます。

沢村と工藤、手を取り合って喜ぶ。

大久保 うまくいった。危険はもう全くない。町の方へは灰を少し降らせるだけだろう。

11場 街の中その2

絵里が立っている。妖艶ないでたちだ。

工藤 絵里、絵里じゃないか。

絵里 ……。

工藤 お前のことがずっと気がかりだった。何年も何年も、お前のことを探していた。

絵里、振り向いてくれ、絵里。

絵里 ……(絵里振り向く)

工藤 ずいぶんと大人になったね。小さい頃と別人のようだ。さあ、兄さんの側において。

絵里は吸い寄せられるように工藤に近づく。

工藤は絵里を抱きしめる。工藤は絵里のにおいをかぐ。

工藤 絵里、お前。何の仕事をしているんだ。このにおい。百姓のにおいじゃない。

町のおいだ。薄汚れた。町のおいだ。

絵里、町でなにをやってるんだ。

絵里 ……マッチを売ってるの。

工藤 マッチをだって。そんなものを売ってるのか。

絵里 ……。

工藤、少し官能的に絵里の体をなで回す。

工藤 お前、まさか。

絵里 ……。

工藤、絵里を突き飛ばす。

工藤 この売女(ばいた)め！

絵里 兄さん。

工藤 お前、そこまで成り下がったか！

絵里 兄さん、聞いて、違うの。

工藤 マッチだって。マッチを売ってるだって。

絵里 話を聞いてよ。兄さん。

工藤 なにをやってたんだ。兄さん、お前と別れてからずっとお前のために、お前と会うことだけを楽しみに生きてきたんだぞ。分かるか。ええ。

それをお前、その身なりは何だ。それじゃまるで……。 (黙る)

絵里 生きるために必要だったの。兄さんだってそうでしょう。

工藤 ……。

絵里 それに私、結婚したの。

工藤 結婚？。いつ。

絵里 三年前よ。

工藤 ……亭主はどんな奴なんだ。

絵里 牧場を経営してるの。それも一つや二つじゃないのよ。このあたりのほとんどの牧場を彼は持つてるの。

工藤 そんな金持ちがお前にこんな格好をさせてるのか。

絵里 ……。

工藤 しあわせなのか。

絵里 ……。

工藤 しあわせなのかって聞いているんだ。

絵里 ええ。しあわせよ。

工藤 じゃあなぜマッチなんか売ってるんだ。

絵里 ……。

工藤 (涙ぐむ) いくらだ。お前の値段はいくらなんだ。え？マッチが一本燃えてる間、お前にいくら払えばいいんだ。

絵里 やめて兄さん。

工藤 たのむ。兄さんにありつただけのマッチをおくれ。いくら払えばいい。いくら払えばいいんだ。

絵里、泣き崩れる。

工藤が側によると絵里は工藤の胸の中に飛び込む。

絵里 兄さん！（泣く）

工藤 ……。

絵里 兄さん。

工藤 ん？

絵里 一緒に逃げてくれる？

工藤 逃げる？

絵里 そう、逃げるの。

工藤 ……。

絵里 兄さんと二人で、また、小さい頃みたいに楽しく暮らしましょう。ねえ、いいでしょ。

工藤 ……。

絵里 兄さん。お願い。

工藤 ああ。

絵里 ……。

工藤 畜生、全部、父さんと母さんが悪いんだ。父さんと母さんが僕たちを捨てたからだ。

僕は父さんたちをなにが何でも見つけた。そして謝らせるんだ。

絵里 もついいわ。飢饉だったんだから仕方なかったのよ。

工藤 いや、父さんたちは無責任だ。許せない。

風が吹く。どこからか鈴の音が聞こえる。

絵里 いけない。主人の音がする。私は帰らなくては。

工藤 主人だつて。

絵里 早く行かないとひどい目にあうわ。

工藤 絵里。行かないでくれ。

絵里 また連絡するわ。すくによ。

工藤 絵里、行くな。まだ兄さんの側にいてくれ。

絵里 ……。

工藤 さあ。

絵里 ……ごめんなさい。今は駄目だわ。さようなら。

工藤 絵里、僕を一人にしないでくれ。お願いだ！

絵里 ……（消える）。

工藤 絵里！

沢村と大久保。

大久保 沢村君、見たまえ。いい景色だ。

沢村 ええ。すばらしい。まさしく雲の海ですね。

大久保 ああ、美しい。

沢村 お茶をいれましょう。

沢村はアルコールランプでお茶をわかす。

大久保 どうだね、沢村君。北のデータは分析できたかね。

沢村 はい。やはり博士の予想した通りでした。

大久保 そうか。流水はまだ残ってるか。

沢村 はい。例年になく異常です。それに5月になってみぞれが十日以上降ったのは観測史上初めてです。

農業地帯ではオリザの苗はほとんど成長していません。

大久保 二十年前と同じだ。とうとう一番恐れていたことがおこってしまったか。

沢村 はい。おそらく20年前の飢饉よりひどい結果になると思われます。

今回は、悪条件が重なり過ぎてます。

大久保 やはり今年がそうだったか。

沢村 はい、こればかりは防ぎようがありません。

問。

大久保 みたまえ、空があんなに美しい。

どうしてだろう、自然は私たちの心を和ませてくれる。しかし、ときには私たちの心を癒してくれるところか恐ろしい刃を向けてくる。

私たちは科学を研究し、ある程度は自然を利用できるようになった。しかし、それはほんの一部の自然だ。

私たちは自然に対してほとんど無力であるといってもいい。私は、こういうときにこそそう思うよ。

沢村 博士。

大久保 あの子はうまくやってるか。

沢村 あの子？・・・工藤君ですが。それはもう。

大久保 おもいだすね。あのときもちょうどこんな空の美しい日だった。

沢村 第17火山の制御でしたね。

大久保 あれはいつだったかな。

沢村 あれから五年になりますか。

大久保 初めて火山の活動を目の当たりにしてびくびくしてたのにな。それが、今じゃもう、主任クラスだ。

沢村 窒素肥料を空から降らせる計画も毎年着実に成功をおさめます。

大久保 私はあの子が、工藤君がかわいくてね。

沢村 ……。

大久保 死んだ息子にそっくりなんだ。どきつとするくらいにね。初めて会ったとき驚いたよ。

沢村 ……そうだったんですか。

大久保 聞くところによると親も兄弟もないそうじゃないか。

沢村 はい、知ってます。あの時の飢饉で親兄弟、ばらばらになっ  
たそうです。

大久保 私が息子を失ったのもちょうどあの飢饉の頃だった。

沢村 ……。

大久保 どうしてなんだろうね。

沢村 ？

大久保 あの子は非常に熱心だ。そして勤勉だ。そうだろう。

沢村 はい。それはもう。

大久保 どうしてだろうね。

沢村 ？

大久保 どうしてあの子はあんなに一生懸命なんだろう。

沢村 ……。

大久保 私はときどきおそろしく感じるときがある。彼は、普通の青年ではない。

沢村 ふつうでない？

大久保 そう思わんかね。

沢村 はあ。

大久保 普通の青年がやりたいだろうことになにも興味をしめさない。そうだろう。

沢村 はい。そういえば。

大久保 あの年頃だったら、恋もしたいだろう。仕事をさぼってどこかへ旅を試みたくなることだってあるだろう。友人とくだらない話に花を咲かせて無駄な時間を過ごすこともあるだろう。

酒も飲むだろうし、歌も歌うだろう。

沢村 はい。

大久保 それが、あの子にはない。あの子にはなにも無駄がないんだ。仕事はもちろん、勉学においても全てトップクラスだ。

このままきちんと勉学をつづければ後2、3年で必ず博士号を取

得できるだろう。

それに窒素肥料を降らす計画だってそうだ。彼が指揮を執り大成功を納めている。

工藤君は今やマス・コミニケーションでも引っぱりだこだ。彼のおかげで火山局の存在が全国に知れ渡るようになったと言っても過言ではない。

しかし、・・・おかしいとは思わんか。

沢村　・・・・・・・・。

大久保　いいことばかりだ。な。いいことばかりじゃないか！

沢村　博士。

大久保　彼は人間なのか。人間というのはもっと欠陥だらけの生き物じゃないのか。それなのに・・・・。私だって、この地位にくまでそれは人一倍がんばった。

しかし、若いときの私は、今の彼の足もとにもおよばんよ・・・・。この私の彼に対する憤りはなんなんだろう。わからなかった。もしかして、彼の能力に対する嫉妬ではないかと思ったこともある。でも違った。そんなんじゃないか。この恐怖にも感じるこの憤りはそんなんじゃないかな。たんだよ・・・・。

沢村君。

私は怖いんだよ。

彼を失ってしまいそうで。

かつて私が息子を失ったときと同じようにね。まさか息子と同じ運命をたどるんじゃないかと。

彼はもう我々の一生分を働いてしまっている。

そういう気がしてね。

沢村　博士！・・・・。

大久保　すまん。つまらなわことだな。

間。

大久保　おお、お茶がわいたな。きれいな夕日だ。

沢村　美しいですね。

大久保　ああ、天使の羽のように美しい。

暗転。

13場　ある農村の食堂

農民1、2、3、4がで気を落として座っている。

工藤が汗をふきふき入ってくる。

工藤 すみません。

沈黙。

工藤 あの、すみません。

全員が、黙って工藤の方を向く。

工藤 ここ、食堂ですか。

農民1 そうだよ。

工藤 よかった。

農民1 でも今日は店じまいだ。

工藤 店じまいですか。・・・あの。

農民1 ・・・。

工藤 何か食べる物はないでしょうか。私、この辺りの農地の調査に来た者なのですが、店が一つもなく。もうお昼もとつくに過ぎちゃってますし。

農民1 ・・・。(無視して外に出てゆく)

工藤 パンかなにか分けてもらえないでしょうか。

農民2 パン。

工藤 ええ、パンです。

農民2 (笑う)パンね。

工藤 ・・・あの。

農民3 パンはあるよ。あるにはあるんだけどどうもくえねえパンだからな。なにしろ石盤だもんな。(せせら笑う)

全員、せせら笑う。

工藤 ・・・。(帰ろうとする)

農民1が戻ってくる。

農民1 おい、表に火山局の車があるんだけど。

農民2 なんだって。火山局だって。

農民は工藤の方を見る。

工藤 それは私が乗ってきたものです。

農民3 お前、火山局のもんか。

工藤 はい、火山局の工藤一と申します。

農民4 工藤？ 工藤ってあの工藤か。

工藤 え、はい。

農民3 窒素肥料を降らせたというあの。

農民2 電気で肥やしを降らせたあの工藤か。

工藤 そうですけど。

農民1 火山局の工藤か！

工藤 ・・それが何か。

農民2 畜生！

農民3 この野郎、俺たちの食料みんなだめにしやがって。

工藤 なんのことでしょう。

農民4 貴様の電気のおかげでおれたちのオリザみんな倒れてしま

ったぞ。なんであんなまねしたんだ。

工藤 倒れるなんて、君らは春に出したポスターを見なかったの  
すか。

農民2 見たともよ。空から肥料を降らせるんだろ。だから、おれ

たちやいつもより少な目に肥料をまいたんだ。

工藤 そうです。そのとおりです。

農民1 言われたとおりをやったらこのざまだ。ええ。

農民4 俺たちの稲をどうしてくれる。

農民1 今年はな。植える種もねえんだよ。おかげで俺たちは飢え

死に同然なんだよ。ええ。

工藤 そんな。

全員口々に「やっちまえ」という。

工藤は農民みんなから殴る蹴るの暴行を受ける。やがて気を失  
う。

暗転。

#### 14場 病院

ベッドで寝ている工藤。頭に包帯を巻いている。

沢村技師、大久保博士がいる。

工藤 ここは。

沢村 工藤君、やっと気がついたかね。

ずいぶんうなされていたよ。



工藤 沢村先生。ああ、大久保博士までどうしてここに。

沢村 動いちゃいかん。君はまだ寝ていた方がいい。

工藤 僕は、ここだなにを。

沢村 君のことが新聞に出てるよ。

ほら、(新聞を広げる)

工藤 ああ、そうだ、あの村で。僕は訳も分からず殴られたんだ。

沢村 君を殴った農民は捕まったよ。

工藤 そうですか。

沢村 あの村の農業技師がね。私ども火山局で指定した肥料の量とは違う分量を農民に指導していたらしいんだ。

それでオリザが全部倒れてしまった。

工藤 そうだったんですか。

沢村 君は有名人だからね。火山局の工藤一といえは。

大久保 農業技師がすべてそのミスを君のせいにしていたらしい。

(笑つ)

沢村 名前が知られてただけにそれは、とんだ目にあつたな。(笑つ)

工藤 そうですか。そういうことだったんですか。

沢村 ほら、君、写真うつりがいいねえ。僕も新聞に出ることがあつたらこんな男前に写るかなあ。(笑つ)

3人、笑つ。

工藤 しかし、今日はどうして博士まで。僕だったらほら、なににも

お見舞いに来ていただくほどのことではないですよ。

大久保 ……(真顔になる)。

沢村 そうだ、あとで君を驚かせることがあるんだ。すごいね。マス・コミュニケーションの力は、  
もうそろそろ現れてもいい頃なんだけど。

工藤 なんてしょう。

沢村 それは来てからの楽しみだ。

工藤 何かくるんですか。

沢村 (笑つ)

工藤 ……ええ？なんてしょう。

沢村 (笑つ) まあ、すぐに分かるよ。

問。

大久保 沢村君、もういいかね。

沢村 すみません。

大久保 工藤君、君の論文を読ませてもらったよ。

工藤 はい。

大久保 私もここ1、2週間ずっとそのことばかり考えてた。

工藤 駄目でしょうか。

大久保 私は今年の冷害の予想についてなんでも新聞や機関誌に意見を述べてきた。

その対策も十分考えてきたつもりだ。

しかし、相手は自然だ。たとえ我々人類がどんなに抵抗してもどうしようもないことだってある。

自然の力は神の力だ。我々科学者が神の力だなんて、そんなことをいってはいけなしかもれない。しかし、神の存在を無視して、科学は語れない。

このことは、君がもっともっと勉強すればいずれ分かってくるだろう。

こんどの冷害は、例年のものとは違う、気象データからしても悪条件がそろっている。

君が小さい頃に飢饉があったらう。

今度のはおそらくそれよりももっとひどいだろう。今世紀最悪の事態になりかねない。

そこで君の論文なんだが・・・(黙る)

工藤 どうなんでしょうか。

大久保 間違いはない。

工藤 可能なんですか。

大久保 可能だ。

工藤・・・だったら。

大久保 可能だが駄目だ。許可できない。

工藤 そんな。

沢村 僕も君の論文を読ませてもらったよ。

東海岸の火山島、第28火山を今、強制的に噴火させ、空気中の炭酸ガスの量を増やす。それにより気温は上昇する。

なるほど名案だ。そう思った。

大久保 地球上の気温は炭酸ガスの量できまるといわれているからね。

工藤 こんど飢饉がおこったら僕のような子どもが沢山出ます。僕はその飢饉のおかげで両親から捨てられたんです。残された妹ともはぐれてしまった。

僕はこの20年間家族もいないたったひとりで生きてきたんです。そんな子どもがこれから何人も出ようとしてるんです。

お願いします。

博士、許可してください。

予算がおりるよう、政府に交渉してください。

大久保 工藤君、これはお金の問題じゃない。とにかく、この計画は許可できない。

工藤 どうしてですか！ 教えてください。  
なぜ駄目なんですか！

沢村 工藤君、私も君の論文を読んだとき飛び上がって喜んだ。これでみんなを救えるんだとね。

そして、具体的にそのシミュレーションをしてみた。もちろん大久保博士にも検討してもらった。

しかしね。この計画は欠陥があつた。それも非常に大きな欠陥がね。

工藤 非常に大きな欠陥？

沢村 相手は火山だ。この複雑な作業をするにはすべて遠隔操作という訳にはいかない。分かるだろう。

工藤 はい。

沢村 どうしても、その作業にいった最後の一人は残らないといけない。

分かるかい。我々のなかで誰かがひとり帰れないんだ。

工藤 ……。

沢村 私はほかの方法がないか、あらゆるパターンをシミュレーションした。しかし、火山を爆発させることになるとどうしても最後の一人は助けることができないんだ。

工藤 ……。

大久保 我々の中で誰かひとり死ねば、何百いや、何万人という人々が助かることは分かっている。

しかし、一人一人の命の尊さは100万人の命の尊さと同じだ。わかるね。

だから、工藤君、君が発案した計画は許可できない。それを言うために私はここに来た。

工藤 ……。

大久保 沢村君、後は頼むよ。私はこれから食糧庁の公聴会に主席しなければならぬ。

これで失敬するよ。

沢村 はい。では後ほど。

大久保 帰ろうとする。

工藤 先生、待ってください。

大久保 ……。

工藤 シミュレーションは僕もやりました。誰か一人は帰れないこ

ともわかってました。

大久保 なに。

工藤 先生、僕にそれをやらせてください！

沈黙。

工藤 最後に残る役目は僕がやります。博士、計画を進めてください。

大久保 ……それは駄目だ。君はまだ若い。それに今の君の仕事に代わるものはそうはいない。

工藤 僕のようなものはこれから沢山出ます。僕よりももっともつと何でもできる人が僕よりもっと立派にもっと美しく仕事をしたり笑ったりしていくのですから。

間。

大久保 その話は私は、いかん……

もう一度沢村君と相談したまえ。

大久保去る。

沢村 やはり、そうだったか。君は最初から知っていたんだね。

先生は、博士は、人ひとりの命の重さは何万人の命の重さと同等だと考えてらっしゃる。僕もおなじ考えだ。

……

工藤君、僕が行こう。その役目は僕が引き受けよう。僕は君よりずいぶん年上だし、ここで死ぬなら全く本望というものだ。

工藤君、僕にいかせてくれ。

頼む！

工藤 先生。

沢村 僕はね。今は君より知識があるかもしれない。そして経験だつてあるかもしれない。しかしね、正直なところ技術者として、もう限界を感じてるんだよ。そう、僕には君みたいな才能がないんだ……

だから僕は能力のないぶん、この身を焼くことによってさこの貢献したいと思う。それが、神から与えられた使命のような気がする……

それに僕ははずかしながらこの年でまだ独り身だ。ほかに悲しむものなんていない。

好都合だ。

工藤 それだったら僕だって同じです。僕だってひとりです。

沢村 違う。

工藤 なにが違うんです。

沢村 君は一人じゃない。君には妹がいるじゃないか。

工藤 はい。でも、もう20年も会ってません。死んでしまったのかもしれません。

沢村 妹さんは生きています。

工藤 気休めはやめてください。僕はついぶんさがしたんです。それでも見つからないんです。

沢村 それが見つかったんだよ。

工藤 え？

沢村 君に後で驚かせることがあるっていったね。(時計をみる) もう着いてもいいころなんだが。

おそらくこの病室が分からなくて迷ってるんだろう。今朝、火  
山局に連絡があってね。新聞で君が怪我をしたという記事を見た  
らしい。

いや、それにしてもマス・コミュニケーションの力というものはた  
いしたもんだ。

もう、そのへんにいるんじゃないか。僕はちょっと外の様子を見  
てくるよ。

沢村 去ろうとする。

ドアをノックする音が聞こえる。

沢村 ほら、おいでなすった。

僕はじゃまだろうから、外に出ている。話が終わったら呼んでく  
れ。

工藤 沢村先生。

沢村 妹さんを大切にするんだ。

沢村、去る。

妹、絵里が入ってくる。

絵里 ……。

工藤 絵里、絵里なんだね。夢じゃないんだね。本当なんだね。

絵里 兄さん。

工藤 僕は何度も何度もお前の夢を見ていた。

絵里、工藤泣く。

抱きしめあって、20年ぶりの再会を喜ぶ。

絵里 今朝の新聞でね。兄さんの記事を見てね。

工藤 そうか？怪我の功名とはこのことだね。

絵里 会いたかった。あたし、もうひとりぼっちだと思ってた。

・・・いろんなことがあったわ。

工藤 兄さんもだ。いろんなことがあった。

工藤、絵里、微笑みあう。

絵里 そうだ、私たちの家どうなったか知ってる？

工藤 ああ、紡績工場になっていた。

絵里 紡績工場？それはずいぶんまえの話ね。

工藤 そうか。

絵里 私たちの家、今は誰も住んでない。だけど、まだかろうじて残ってる。

工藤 そうか、まだあったのか。

絵里 私ね。そこにいけばいつかきつと兄さんに会えるんじゃないかと思っただけでも足を運んだのよ。

でも、兄さんに会えるどころか、家はだんだん朽ち果ててしまっし。

工藤 すまなかった。でも、兄さん、お前のことを思い出さない日は一日もなかった。

絵里 私も兄さんのことを。

問。

絵里 お仕事は？

工藤、近頃は忙しくてね。

絵里 火山局の？

工藤 そう。

絵里 立派なお仕事なのね。

工藤 うん。毎日が充実している。

そうだ。お前はどうかんだ。今なにをしている。

絵里 結婚したの。

工藤 いつ。

絵里 三年前。

工藤 そうか。結婚したのか。

絵里 娘もいるわ。

工藤 娘がか。そうだな。もうそんな年だもんな。

絵里 兄さんは。

工藤 僕？ 僕はまだだ。  
仕事仕事で。

そうか。子どもがいるのか。

・ ・ ・ 父さんや、母さんのことは聞かなかったかい。僕もずいぶん探してはみたんだが。

絵里 知ってるわ。

工藤 見つけたのか。

絵里 ええ。

工藤 どこにいる。どこにいるんだ。

絵里 それが・ ・ ・。

工藤 それが？

絵里 もうずいぶん前のことだけど、私、前に紡績工場で働いていたという男にあったの。

彼がいうにはね。森の中で、冷たくなった二人の男女を見つけたらしいの。

工藤 まさか、それが・ ・ ・。

絵里 二人は重なり合うように倒れていたって。

それでね。とりあえず、このままではあまりにかわいそうだというので土に埋めて簡単な墓を建ててくれたらしいの。

そう。私、その男に案内されてその墓を見に行ったわ。

工藤 墓は？

絵里 あったわ、森の中に眠る男女の墓。って丸い小さな石に掘ってあったわ。

工藤 そうだったのか。

絵里 兄さんとよく遊んだちよつどあそこよ。

だから、父さんと母さんの墓に間違いないわ。

工藤 ・ ・ ・ 父さんと母さんは僕たちを置いてでいったあとすぐに死んでいったんだ。

絵里 ・ ・ ・。

工藤 僕は、父さんと母さんを恨んでいた。ずっとだ。僕たちは父さんと母さんから捨てられたんだとばかり思っていた。

絵里 私も、父さんと母さんを恨んだわ。でもそれは間違ってた。

工藤 もう食べ物が無いのを知って。僕たちの食べ物を残すために・ ・ ・。

僕は恥ずかしい。僕はずっとずっとお父さん達がなくなったその意味に気がつかないでいた。僕は、いったい・ ・ ・。(泣く)

絵里 兄さん。

工藤 絵里。今、しあわせかい。

絵里 ・ ・ ・。(頷く)

工藤 外に沢村先生が居るはずだ。呼んできてくれ。

絵里 沢村先生？

工藤 ほら、さっきそこにいた人だ。

絵里 はい。

絵里、出ていき、沢村を連れてくる。

沢村 どうした。ずいぶん早いな。つまる話もあったらどうに。

工藤 先生、僕は決めました。今度の件

……。

僕にやらせてください。お願いします。

沢村 ……妹さんに話したのか。

工藤 いえ、まだです。でもきつと分かってくれます。死んだ両親

への償いです。

沢村 償い？ しかし……。

工藤 いえ、今度の仕事はあまりに不確かです。もし、爆発が成功したとしても、そのあと煙が雨にとられてしまつかもしれない。

また、なにか別の障害が起きるとも限りません。そんなとき先生がいらっしやらなければもうどうしようもありません。

沢村 しかし。

工藤 先生に行かれては、今の私の知識ではどうしようもありません。

沢村 ……。

工藤 僕が行きます。これは僕の役目ですから。

沢村 ……。(項垂れる)

絵里 兄さん、どうしたの。なにがあったの。

工藤 絵里、今から説明するよ。

先生も、もう一度僕の説明を聞いてください。

暗転。

15場 最後の誘惑(幻想的に)

遠くで祭りの音が響いている。

工藤、ひとり泣いている。

絵里が現れる。

絵里 ……。

工藤 誰だ！

絵里 兄さん。



工藤 絵里か。

絵里 兄さん。どうして兄さんなの。

火山局には沢山の人がいるんでしょう。

なにも兄さんじゃなかったっていいじゃない。

ほかの人だっていいじゃない。

工藤 これは僕が言い出したことなんだ。

絵里 だからどうして兄さんなのよ。兄さんひとりがどうして犠牲にならなくちゃいけないの。

工藤 絵里、僕が行くことはもう決まったことなんだ。今更取り消すことなんてできない。

絵里 どうして、どうして取り消せないの。

工藤 僕のためにたくさんのひとと、沢山のお金が動いてるんだ。みんなは僕に期待してる。もし、僕が行かなかつたらおそろく他の人が行くことになる。

おなじことだ。

絵里 兄さん。兄さんは私のたった一人の兄さんなのよ。

工藤 わかってる。わかってるよ、絵里。

でも、僕は火山局の工藤一なんだ。

火山局の代表として新聞で何回も取りあげられてきたんだ。

絵里、死ぬと分かかっていてもやらなくちゃいけないときがある。わかってくれ。

絵里 うそよ！ うそよ！ うそつき！

絵里、狂ったように工藤をなじる。

絵里 なにを格好つけてるの。一人になるとあなたいつも泣いてるじゃない。兄さん、私に格好つけてどうするの。どんなにいいかっこうしても死んでしまっっては終わりなのよ。

工藤 ……。

絵里 ねえ。兄さんは一人じゃないの。いつまでも強くなくていいの。弱いに兄さんでいいのよ。

絵里、工藤を抱きしめる。

するとそのとき、マッチの箱が一つ落ちる。

工藤 このマッチ。…まさか。

あれは僕の夢の話じゃなかったのか。

絵里 兄さん。私はマッチを売って生きてきた。でもそれは兄さんに会うためのよ。兄さんに会うためにどんなに辛いことでも我慢してきた。

工藤 ……すまん。

工藤、愕然とする。

工藤は絵里の胸にすがるように泣く。

工藤 すまん。すまん……。

絵里 いいのよ。兄さん。

工藤 絵里。怖いよ。僕は本当は怖くて眠れないんだ。毎日毎日。

(号泣する)

みんなは僕に期待してるんだ。その期待に僕は押しつぶされそうなんだ。

絵里 兄さんはもう十分苦しんだわ。いいのよ。逃げましょつ。

逃げるのよ。なにもかも捨てて。いいわ。私も一緒に逃げるわ。

兄さんがすべてを捨ててくれるなら。

昔、兄さんと住んでたあそこ。あの森の家なら誰にも見つからずに暮らせるわ。

木の実をとったり、狩りをしたりすれば、

たとえ飢饉がきたとしても何とか私たちだけだったら食べていけるでしょ。

いい、28火山島の裏にボートを用意するわ。

みんなを帰したあと、そのボートに乗って逃げるのよ。

工藤 ……。

絵里 逃げるのよ。兄さん。兄さんは私の兄さんなの。私一人の。

火山局のものじゃないわ。

落雷。

## 16場 森の家

雷鳴。

嵐の口。

絵里が幸子に物語を読んで聞かせている。

絵里 グスコープドリは、イーハトーブの大きな森の中に生まれました。お父さんは、グスコーナドリという名高い木こりで、どんな大きな木でもまるで赤ん坊を寝かしつけるようにわけなくきつてしまう人でした。

ブドリにはネリという妹があつて二人は毎日森で遊びました。こしっこしつとお父さんの木を引く音が、やっと聞こえるくらい遠

くへもいききました。二人はそこで木いちこの実をとってわき水につけたり、そらに向いて代わる代わる山鳩の鳴くまねをしたりしました。するとあちらでもこちらでも、ぽう、ぽうと鳥が眠そつに鳴き出すのでした。

お母さんが、うちの前の小さな畑に麦をまいているときは・・・

工藤、現れる。頭に白い包帯を巻いている。

工藤 やめてくれ！ その物語を読むのはやめてくれ。

絵里 あなた。

工藤 眠れないんだ。僕は眠りたいんだ。

絵里 あなた、疲れてるのよ。

幸子 どうしたの。

絵里 なんでもないわ。いつものことなの。

工藤、絵里の持っている本と取りあげ

題名を見る。突然、狂ったようにその本を破る。

絵里 なにをするの！

幸子 母さん！

工藤 これは違うんだ。これは嘘なんだ。なにもかも嘘なんだ。僕はここにいて、

僕は死んでいない。僕は、あのととき、ボートに乗って逃げたんだ。

そして、今、ここにいて。僕は、伝説の人なんかじゃない。

絵里 あなた。

ドアをノックする音がする。

工藤 誰か来た。

絵里 あなた。隠れて。

工藤 いやだ。

絵里 隠れるのよ。

工藤 どうしてなんだ。どうしていつも隠れないといけないんだ。

来客がある度ずつとだ。

絵里 あなた。

工藤 いやだ。ここにいて。隠れない。

ドアのノックの音が激しくなる。

玄造 すみません。開けてください。お願いします。夜分すみませ

ん。お願いします。

絵里はドアを開ける。

玄造　こんなに遅くすみません。私、この山のふもとで農業を営んでるものなのですが。

絵里　はい。

玄造　息子が熱を出しまして。

薬を分けていただけないでしょうか。熱が高くてもう死にそうなんです。

絵里　うちもあいにく切らしております。

玄造　そうですか。

絵里　お役にたてなくて。こんな山奥より街にいった方がよろしかったのに。

玄造　いや、街はもうだめです。すっかり荒れてます。

飢饉の年があったでしょう。あなたは山におられるから詳しくは存じ上げないかもしれませんが。そりゃもう、ひどいもんです。あれから数年、気候はいつころによくならない。薬なんてとんでもない。もう、街には食べる物さえない。餓死する者もたくさんでてます。

私ら農民はまだ蓄えがあったからしばらくはなんとかしのいでいたのですが。街のものはもう、目も当てられません。

工藤　僕は・・・僕は・・・。

玄造　そこにいるのは・・・。

絵里　けが人なんです。すみませんがもう休みますので。

玄造　・・・。

絵里　さあ、あなた。

玄造　・・・。

絵里、工藤驚く。

玄造　一（はじめ）じゃないか。どうしてこんなところに。わしはとくに死んだときいていたぞ。

工藤　・・・。

玄造　わしだよ。ほら山師の。お前に農業をいちから教えた玄造だよ。わからんのか。

絵里　人違いです。お帰りください。

玄造　人違いだと。いやそんなことない。確かに一だ。一！

工藤　・・・。

絵里　この人は病気なんです。

へんなことというのはやめてください。

工藤 . . . .

絵里 さあ、お帰りください。

男が二人入ってくる。

大久保博士と沢村技師だ。

大久保は杖をついている。大久保は以前のような姿はなく、まるで廃人のようだ。

沢村 工藤 やつとみつけたぞ。

こんなところにいたのか。

お前が生きているという噂は聞いていた。まさかとは思ったが。

工藤 沢村先生。

沢村 裏切り者！ 今までなにをやっていた。こんな山奥でなにをやっているんだ。

工藤 . . . .

沢村 博士をみる！ 目も耳も聞こえない。廃人同然だ。お前のせいだ。お前が最後の最後で逃げたからだ。博士はな。あの計画が失敗して責任を追及された。かわいそうに博士は自分を責めたんだ。今では自分が誰なのか分からなくなっている。

お前のせいだ！ 腰抜けが！

何のためにあの重要な役目を俺はお前に譲ったんだ。ええ。

お前が逃げ出すくらいなら俺がやっていた。

いいか。お前が逃げたために町では何人の人間が死んだと思ってるんだ。

お前はそれを知っていてこんなところにいるのか。

工藤 . . . .

でも、僕は僕は、ここにいる妹が、妹のことを思うと . . . .  
先生、お許してください。僕はみんなのしあわせより、たった一人の妹のために生きることに決めました。それが僕のしあわせです。それが僕が選んだ道だったんです。

沢村 本当に、おまえ、しあわせなのか。

いま、本当にしあわせなのか。

工藤 . . . .はい。

沢村 お前が逃げたために沢山の人々がひどい目にあっただぞ。それでもお前しあわせなのか。

声。子ども達が飢えてくるしむ声が響く。

工藤の頭に痛みが走る。

玄造 一、本当に幸せなんだな。

工藤 ああ・・・妹と子どもと一緒に暮らせて・・・しあわせです。

玄造 妹？ 子ども？ なんのことだ。

工藤 絵里のことです。僕は絵里のためにここで暮らすことを決めたんです。

玄造 一、妹さんと暮らしてるというのか。

工藤 はい。

玄造 見つかっただな。

玄造 はい。

玄造 その妹さんはどこにいるのだ、一。

工藤 はい。ここに・・・。

絵里と幸子はそのいるのだが、

工藤達にはみえなくなっている。

沢村 工藤、お前のほかに誰かここにいるのか。誰もいないじゃないか。

工藤 ……(辺りを見回す)。

まさか、絵里！ 絵里！

玄造 (哀れむように)妹と一緒に住んでいるのか。

工藤 そうです。ここにです。ずっといっしょに住んでいるんです。

沢村 ここに住んでいる、か。

工藤 そうです、先生。

玄造 一、しっかりしろ。

工藤、半狂乱になり部屋中を探し回る。

工藤 絵里！ 絵里！

玄造が絵里と幸子を見つける。

玄造 何だこれは。これはひどい。獣の死体だ。かわいそうにこれはおそらく親子だな。

工藤 まさか。

沢村 ああ、これはひどい。餓死したんだ。飢饉は森まで広がっていたのか。

工藤 これは、この死体は。

玄造 ああ、獣だ。獣の死体だ。

工藤 ……僕は、僕はなにをいままで、なにをしていたんだ！

玄造さん！

玄造 ……

工藤 沢村先生！

沢村 ……

工藤 博士！ 博士！ すみませんでした。

僕が間違っていました。僕は僕は甘えてました。博士、僕はあなたをこんな姿にしまいました。

あなただけでない。僕が逃げたばかりに沢山の人々の命を奪ってしまった。

僕は、取り返しのつかないことをしてしまった。

大久保 ……

工藤 博士、目を開けてください。そして僕に償いをさせてください。お願いします。

博士！

声。沢山の人々が苦しむ声が聞こえる。

工藤 博士！ 許してください。

大久保 ゆっくりと目を開ける。

大久保 ……ブドリ。ブドリよ。

工藤 博士。

大久保 君はブドリ君だね。

工藤 はい、ブドリです。

大久保 そうか。それはよかった。

君がブドリで。

工藤 はい！ 僕はグスコブドリです。

全員、ブドリの名前を連呼する。

全員 ブドリよ、ブドリよ。

こんなにみんなに見守られながら

お前はまたここで苦しまなければならぬか。

ああ、巨（おお）きな信の力から、ことさらにはなれ

また純粹や小さな徳性の数を失い

わたくしが青くらい修羅を歩いているとき

お前は自分にさだめられたみちを

ひとりさびしく往こうとするか

信仰を一つにするたったひとりのみちつねのわたくしが

あかるくつめたい精進のみちから悲しくつかれていて  
毒草や蛍光菌のくらしい野原をただよつとき

お前はひとりどこへ行くこうとするのだ

ああ、ブドリよ。

私は未だ眠ることができない。

ああ、ブドリよ。

私は未だ眠ることができない。

工藤、神に懇願する。

工藤 僕には役目があった。それを忘れていました。

主よ、私の心をご覧ください。こんなにむなしく命をすてず、ど  
うか、この次には、まことのみんなのしあわせのために私の体を  
お使いください。

お願いします。

暗転。

17場 病院

ベッドで寝ている工藤。

沢村技師、大久保博士。

沢村 工藤君、工藤君。(繰り返す)

工藤 . . . .

沢村 やつと気がついたかね。ずいぶんうなされていたよ。悪い夢  
でも見たんだろう。

工藤 沢村先生。ああ、大久保博士までどうしてここに。

沢村 動いちゃいかん。まだ寝ていた方がいい。

工藤 . . . .

沢村 君のことが新聞に出てるよ。

ほら、(新聞を広げる)

工藤 . . . .

沢村 君を殴った農民は捕まったよ。

工藤 . . . .

沢村 あの村の農業技師がね。私ども火山局で指定した肥料の量と  
は違う分量を農民に指導していたらしいんだ。

それでオリザが全部倒れてしまった。

沢村 君は有名人だからね。火山局の工藤一といえば。



大久保 農業技師がすべてそのミスを君のせいにしていたらしい。

(笑う)

沢村 名前が知られてただけにそれは、とんだ目にあつたな。(笑

う)

工藤 . . . .

沢村 ほら、君、写真うつりがいいねえ。僕も新聞に出ることがあ

つたらこんな男前に写るかなあ。(笑う)

大久保 沢村君、時間がない。本題にはいつてよろしいかな

沢村 すみません。

大久保 さて、工藤君、君の論文を読ませてもらったよ。

工藤 はい。

大久保 第28火山を令、強制的に噴火させ、空気中の炭酸ガスの  
量を増やす。それにより気温は上昇する。

なるほど名案だ。

工藤 はい、ありがとうございます。

大久保 しかしね。君の案には残念ながら賛同できない。

工藤 なぜ?なぜなんです博士。

大久保 相手は火山だ。この複雑な作業をするにはすべて遠隔操作  
というわけにはいかない。分かるだろう。

工藤 はい。

大久保 どうしても、その作業にいった最後の一人は残らないとい  
けない。

工藤 . . . .

大久保 だからこの計画は許可できない。

言うことはこれだけだ。

工藤 . . . .

大久保 沢村君、後は頼むよ。私はこれから食糧庁の公聴会に主席  
せねばならない。

これで失敬するよ。

沢村 はい。では後ほど。

大久保、帰ろうとする。

工藤 博士、まってください。

大久保、立ち止まる。

工藤 先生、僕にそれをやらせてください!

沈黙。

工藤 僕が言い出したことです。最後に残る役目は僕がやります。僕にやらせてください。博士、計画を進めてください。

大久保 それは駄目だ。君はまだ若い。それに今の君の仕事に代わるものはそうはいない。

工藤 いいえ。僕のようなものはこれから沢山出ます。僕よりももっともつと何でもできる人が僕よりもっと立派にもっと美しく仕事をしたり笑ったりしていくのですから。

問。

大久保 いいだろう。君に任せる。

大久保去る。

工藤は初めてしあわせに笑う。

工藤 ありがとうございます。

あたり一面、まぶしいくらいの明るさに染まる。

## 一幕

引用・参考文献

宮沢賢治著

「グスコープドリの伝記」

「銀河鉄道の夜」

「春と修羅」

筑摩書房

野坂昭如

「マッチ売りの少女」

大和書房